

「我とそれ・我と汝」

～聖霊様と共に生きる2～

ヨハネ15:25～16:33

動物園にいる、人間によく慣れたあの動物たちはどこからやってきているのでしょうか。動物園で生まれることもありますがほとんどは捕まえて動物園に売られてくるのです。猿は動物園でも人気の動物です。そんな猿を捕獲する際、かつては罠を仕掛けていました。でもこれまでの罠のような恐怖を与える方法は、人間を恐れるようになり、またそれによって傷を負ってしまうことがあります。最近ではそうならないように捕獲する罠も工夫され、より巧妙に、より小さいうちに捕獲するようになり、人間にとっては簡単に思えますが、幼い猿には解けない罠です。子猿の腕がやると入るような穴の先に餌を置き、その穴に手を差し入れ餌を掴むと、その手に握った餌を手放さない限りは抜けられない仕組みです。餌を手放したくないと戸惑っているうちに眠らされ、起きればそこは動物園といった具合です。私たちがこの猿の様子を見て、こんな簡単なことがわからないなんて思っているのではないでしょうか。だけでも、私たちが同じようなことをしていることがあります。握っているものは怒りや悲しみ、過去。それらを頑なにその手に握りしめてしまっ、悲わたりたいと願いつつもそれを手放すことが出来ない、そんなものはありませんか。

■ 我が誰かに出会う時～三つ子の魂100まで

大人になって3歳以前の記憶が残っている人はほぼまれで、ほとんどの人には記憶は残っていないのではないのでしょうか。3歳までは自己中心の欲求を満たしてもらうことで、愛されていることを判断する大切な時期です。3歳以降は原罪の自己中心を記憶から完全に消し去り、新たな価値観を形成します。これをまっすぐにしっかりと壊し、土台を新しくすることでその後のコミュニティでの生き方を学ぶのです。そして愛してくれる対象がどんなものか理解し、それがまた不完全なものであるということも漠然と知ります。自己中心に求める欲求は原罪です。カインとアベルという、アダムとイブの子である兄弟のお話が聖書に出てきます。彼らは神様に捧げものをしますが、その捧げた内容に「それ」と汝:「あなた」がよく表れています。持てる中の最良を捧げた弟アベル。その心を喜ばれた神様のアベルへの評価に対して、大いに嫉妬した兄カイン。彼らの違いはその視線でした。カインの捧げたものは、自分の欲求を満たしてくれる「それ」にたいしての捧げものという形でした。一方アベルの捧げたものは「あなた」に対しての心だったのです。アダムとイブが神様を「それ」としてがために彼らに受け継がれた原罪なのです。子供が3歳までの記憶を消去して新たな概念で生きるのとは、大人になるための手段として療育者としての「それ」に置き換えていくためです。恋愛においてもその関係性がよく表れます。愛しい「あなた」が、結ばれたら互いの欲求を満たす道具としての「それ」に変わってしまうのは、自己中心という原罪のなせる業なのです。私たちに、男は相手に欲求を満たす道具として、女は自分を守る道具として、互いに「それ」として見てしまうようになってしまいう弱さがあります。もっとも重要な概念は、我と汝と我とそれ、という人間の認識の仕方はその2通りであり、「それ」は1.5人称で相手を対象化し、欲求を満たすものへと変化させ、汝:「あなた」は三人称で未知の他者への両親への欲求の欠落から始まり、神様、人間関係へと失望は続くのです。「あなた」がそうして「それ」になってしまったがために、神の子であるイエス・キリスト様は、そんな私たちが我とあなたに返るため、人から裏切られ、父なる神から完全に見捨てられ、十字架にかかるという道を辿られました。我と「それ」を断ち切り、我と「あなた」に戻るプロセスのために、回復の道を十字架によって成し遂げる必要があったのです。その唯一の方法は、その人を許し、新たな土台でその人を見ることなのです。我とそれ=十字架=我とあなたですが人間だからこそ、私たちは肉体と内側が相反し、態度と思いのずれを生んでしまいます。相手を概念化して見してしまうのが私たちが人間の原罪です。人に3度目に会うときにはすっかり、自分の固定概念を形成してしま、あの人はこうだ、こうしてくれるはずだと決めつけてしまっています。その時点ですでに自己都合のための概念化:道具化してしまっているために、その先に待つのは裏切りとなってしまいます。道具と道具では欲求を満たせるわけもなく、よくなりようがありません。それではつまづきます。本質ではない偽りは裏切りに陥ります。それとして見ないためには、相手が本質に近づくことを神様の視線によって喜ばねばなりません。その人の本質を見出させようとするのが神様の愛という存在なのです。愛の存在は神様の視線で、相手を自分と同じ場所に置き、相手の偽りに至る背景から本質を探る手伝いができるようになるのです。

■ 弟子たちの我とそれ問題

・ペテロ(ヨハ13:36)「主よ。どこにおいでになるのですか。」熱心党員で雷の子と言われた、ペテロの「それ」の存在の否定
・トマス(ヨハ14:5)「主よ。どこにいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうしてその道が私たちにわかりましょう」慎重派で疑い深いトマスの懐疑的な「それ」
・ペリポ(ヨハ14:8)「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」信じることの出来ないペリポの「それ」
・ユダ(14:22)「主よ。あなたは私たちにほご自分を現わそうとしながら世には現わそうとなさらないのはどういうわけですか。」分析屋のユダの「それ」に対する保証要求

本質と現実のはざまでは彼らは弟子であるにもかかわらず、不安に支配されていました。唯一背反は常識的ですが、現実には救いともなりませんが排他的に理解しがたいものとなります。墓りは不義であり罪である、とあります。罪のあるうちは本質的真理の理解ができないまま神様を見上げるので、御言葉がその耳に伝わらず神様を見ることのないままにクリスチャンを続けていくこととなります。それは悲しみなのです。神様を見る側面はそれとして見るように、過去の価値観に基づいて神様をもそれとして利己的に見てしまう弱さがあるので。

■ ①心を騒がすな 平安の中に ヨハネ14:21～

神の奥義は、私たちの人生を愛する人が神様だということを理解することです。その愛してくれる神様を愛するということが、私たちの愛なのです。相手を「それ」として見るときには、欲求を満たさない相手は不要と思ってしまうかもしれませんが、「あなた」として見るならば、なぜそれが満たせないかを探ることができるのです。それがなぜを見て許し、その傷から自分をも見て平安を選ぶ、愛を知る私たちができることなのです。

■ ②悲しみ ヨハネ16:19～

神様はアダムとイブの時代に苦しみの定めをおきました。ですが同時に、その定めと通ったものだけが味わうことの出来る喜びをも用意されました。それはイエス様の遺言にもある事実です。悲しみの後に喜びが待っていることを知っている私たちは、悲しみが起こることを恐れませんが、定めを通るといことは、私たちの人生を変えることです。救いのプログラムを信じて、怒りと逃避と責任転嫁に変化させる弱さに負けずその決断ができるのは直面しているあなただけ、許すことができるのもあなただけなのです。

■ ③父を悟る ヨハネ16:25～

最初に躓くのは両親への不満足です。聖霊様は私たちに、父という存在を知るためのプロセスとして悲しみを通します。その先に喜びの恵みと、本当の土台を作り私たちの足元を安定させようとしてくださっています。父を知るチャンスとして、悲しみをまっすぐ受け取り、神の声を心騒がせず平安を祈り静まって聞き、選択肢を捨てて祈れば、父の存在を理解できるようになります。御言葉は、細く小さな声でまたそれは難しいことなので、平安がないと選べないのです。

■ 無から有を生み出す神様

主よ聞かせてください。無くて聞かえないのではなく、聞かえない存在である。聞きさえすればそこにあるのです。求めればあるのです。聖霊様がいつも働けるように、あなたが平安を探そうとすることができますように。神様の本質を無にしない生き方を選び取ることができますように。どんな状況をも喜び、神様への信頼を築き上げ、いと高きところに神様の栄光がありますように。賛美の中で両手を広げ、神様に向けてすべてを委ね無抵抗になることが、大いなる神様の愛を受け取り、その愛の大きさを理解するために聖霊様とともに歩む第一歩なのです。

(要約者:牧 三貴子)

(2018年11月25日)